

それまでは、人類は絶対的支配のくびきのもとにあったが、近代社会は、ヨーロッパの人々にとって大きな希望として始発した。しかし、一九世紀から二〇世紀にかけて、近代社会の経済システムである資本主義は、国家間を武力による激烈な闘争に巻き込んで二つの世界大戦という悲惨なカタストロフィにまで押しやった。



近代社会

近代社会の後ろ盾となった近代哲学を否定して新しい哲学・思想を模索した。現代哲学が近代哲学の普遍洞察の方法を危険なものとして否定し、投げ捨てた(マルクス主義、分析哲学、ポストモダン思想)

★相対主義哲学は、独断論的イデオロギーが人々にとって圧制的となるとき、つねにこれを相対化し批判するという重要な役割を果たしてきた。

現代哲学には、独断論と相対主義の方法だけが残された。

◎現代哲学では、哲学の根本方法(普遍認識)を否定する相対主義哲学がその舞台を席卷してきた。現代哲学の最大の病

相対主義哲学

相対主義は一切を批判するが、現実に対抗する論理を生み出すことはできない。なぜなら、それは現実を変える条件を「原理」として見出す方法をもたず、さらに、その論理を徹底するなら、すべては力が決するという「現実論理」に帰着する。そのことで必ず「現実」に屈服するほかないからである。

そもそも人間だけが言葉によって「世界説明」を行なう。そして、古来人間は、二種類の「世界説明」の方法をもった。

①宗教が現われ「物語」によって世界を説明した。

人々の生の苦しみを癒す力があるが、**共同体の枠組みを超えることができません**、その境界線でコンフリクトを生じる。

②その後哲学が登場し、はじめて「普遍洞察」の方法を生み出した。

このことで哲学は、「原理」の方法となった。



絶対的な認識(真理)ではなく、誰にとっても妥当する説明方式

万人にとっての共通了解となりうる普遍的な世界説明を創出する方法

哲学は「物語」を用いず、概念と論理を使用することによって普遍的な「世界説明」をめがける。

しかしこの方法が、哲学の大きな弱点となる。論理(理屈)を駆使して白を黒とも言いふせる詭弁的論法が現われ、哲学に似た哲学の鬼子、「形而上学」(独断論)や「相対主義」(懐疑主義)哲学が現われる。

この相対主義の役割はいまでは無意味なもの、むしろ有害なものになっている。

時代の矛盾を克服するための可能性の原理を見出すべきだ。

◎なぜ人間にとって普遍的な世界説明が必要とされるのか。

「**普遍暴力の縮減**」によって、**すべての人間の共存とエロスの共生の条件を作り出す**ために必要。

*哲学は、いまもう一度、普遍的な「世界説明」の創出の営みとして、普遍洞察の方法として再生されねばならない。われわれの時代の人間と社会の可能性にとって必須のものである。

全く新しい哲学が必要